

戦前のわが国の女子体育教師の教育に関する研究

掛水 通子

I 研究目的

本研究者は女子体育教師の変遷に関して、文部省や学校等の文書史料、雑誌等の文献史料を用いて女子体育教師養成機関の比較研究、女学校の体育指導者、女子の体操科教員免許状取得者などについて報告してきた。史料収集するなかで、教育現場で教育に当たった女子体育教師自らにより文字で残された、教育の実際に関する史料は非常に少ないことが明らかになった。

従来の体育史研究は文書史料研究が中心であったが、質問紙による史料の史料価値についても検討され、質問紙調査は文書史料の欠を補う意味での史料価値を認めることができるのみならず、文書史料が十分な場合でも、その補強の意味での史料価値を認めることができるとされている。したがって、文書史料の収集に努めると共に、生存している女子体育教師から質問紙により史料を収集し、残しておく必要があるのである。

本研究では、生存する戦前の女子体育教師に対する教師歴、教育内容、女子体育教師に対する評価、思い出等の調査から史料を収集すると共に女子体育教師の教育の実際を明かにし、定説との関連についても検討することを目的とする。

II 研究方法

(1) 調査対象

本学の前身である私立東京女子体操音楽学校（以下音体と略す）の卒業生¹⁾のうち、回答可能と思われるもの²⁾を対象とした。1923（大正12）年3月の28

期卒業から1946（昭和21）年3月の最終期である51期卒業までの24期にわたる154名の卒業生から調査用紙を回収したが、そのうち21名は病気、高齢等の理由で回答を辞退するものであったので、133名の回答について検討した。その際、回答者全体、あるいは五期に区分した卒業年別³⁾に検討した。これらの卒業生は戦前みの女子体育教師というわけではないので、題目が不適切な面もあると思われるが、史料収集の都合上、得た回答から戦前を中心として考察する。

(2) 調査方法と調査期日

郵送による質問紙調査を1993（平成5）年11月に実施した。回収率は52.4%、有効回答率は45.2%であった。

(3) 調査内容および処理方法

質問項目は教師歴、受け持ち教科、教育内容、女子体育教師の評価、思い出などの19項目であった。その内、教育内容、女子体育教師の評価、思い出などの7項目は自由記述、他は選択肢により回答を求めた。自由記述で求めた回答も傾向を捉えるためカテゴリー化し分析した（本稿IIIの2、3、4）。本稿では自由記述の部分は事例を挙げながら検討する。特別な場合を除いて、回答者の中での傾向を考察した。

III 結果と考察

1. 教師歴

(1) 勤務年数

①全勤務年数、教職年数、体育教師年数

教職に限らない全勤務年数は平均25.7年、そのなかの教職年数は平均25.5年、体育教師年数は平均

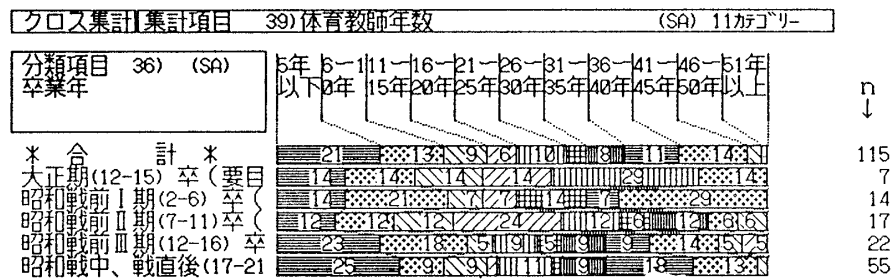


図1 卒業年別体育教師年数 (%)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

22.5年であった。職業生活のほとんどを体育教師として過ごしたことがわかる。しかし、5年刻みで見るとそれぞれ最も多くを占めるのは5年以下であり、次いで41年から45年であった。早く辞めるか、最後まで勤めるかの両端が多いことがわかる。

②卒業年別体育教師年数

五期に区分した卒業年別に体育教師年数を見ると、図1に示したようにどの卒業年も体育教師年数が分散している。最も多い5年以下は21%である。戦中、戦直後は5年以下が最も多い。一方、41年以上が合計17.4%もある。個人によって様々な事情があり、勤続の長短はまちまちである。前報⁴⁾で報告したように、この当時の卒業生のほとんどは卒業直後教師となっているから、他の職業との勤務年数の比較はできない。その後の職業の多様化により、民間事務職・商業等に就いた本学の卒業生は5年未満で32%、10年未満で76%が職を離れているので、体育教師年数の平均22.5年は、長いとみなして良いであろう。

(2) 受け持ち教科

図2に示したように全体では「体育(体操、体錬、

保健体育)のみ」を受け持ったものが39.1%、次いで「体育と音楽」の37.6%、「体育、音楽とさらに他科も」が15.0%、「体育に加えて音楽以外の教科」が6.0%、「音楽のみ」が1.5%であった。したがって、「体育のみ」は約四割のみで、六割近くのものが「体育に併せて他の教科」を受け持ったことがあることになる。昭和に入ってから卒業生は「体育と音楽以外の教科」を受け持つものは次第に減少し、昭和戦前Ⅲ期以後「体育のみ」の担当が増えた。

「体育と音楽以外の受け持ち教科」は実数で作法(8人)、理科、家庭科(7人)、習字(6人)、国語(5人)、家事、英語、裁縫、手芸(3人)、図画(2人)、数学、地歴、修身、割烹(1人)と多岐にわたっている。

戦前の女子体育教員養成機関では、二教科を修めていたのは本学のみではなかった。女高師の国語体操専修科は国語と体操を、第六臨時教員養成所体操家事科は体操と家事をとった具合である。体育と音楽は密接に結びついた教科で、当時の体操、遊戯の伴奏には音楽が不可欠であったという意味がある。

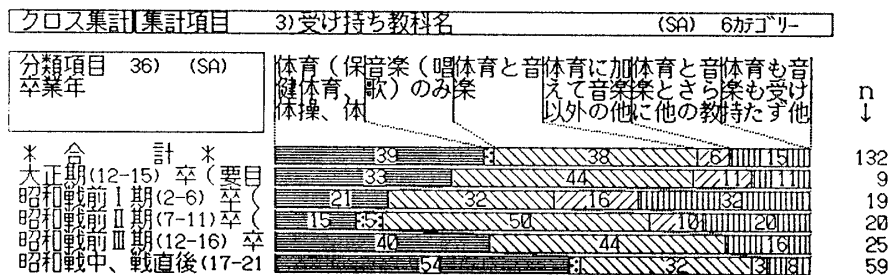


図2 卒業年別受け持ち教科 (%)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

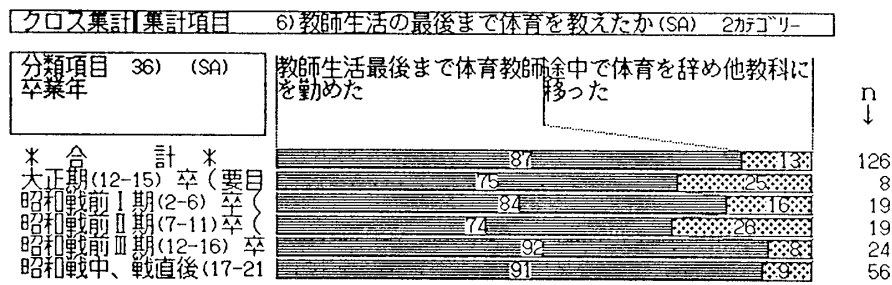


図3 教師生活の最後まで体育を教えたか (%)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

そのほかに、一つは教養のためであり、一つは女教師が就職する女学校では二教科以上受け持てる方が好都合であったからである。

(3) 最後まで体育教師を勤めたか、他科へ転じた理由

図3に示したように、87%が「教師生活の最後まで」体育教師を勤め、13%が「途中で他教科」に移っている。卒業年別にみると昭和12年以降では91%以上が最後まで勤めている。他科へ転じた理由は、他教科を教えなくなったから(4人)、病気や怪我のため(3人)、学校の都合で(3人)、身体がつかなくなって(1人)などであった。

昭和13年に、当時体育界の第一人者で東京高師教授の大谷は女子体育教師の不足の理由を、「卒業した者が皆家事ばかり行って、これ迄数百人体操科の方を出て居るのですが、現に体育をやっている人は此の片手を屈する程しかありません。(中略)体操が嫌だから家事の方へ移って行くのです。」と述べている。このように体操が移ったのは第六臨教体操家事科の卒業生であって、音体出身の女子体育教師にはあてはまらないことが明かとなった。

(4) 勤務校

① 学校種類

教師として勤務経験のある学校は図4に示したように、旧制度校では高等女学校が91.1%、師範学校が11.4%、実科高女が10.6%、新制度校では高校43.9%、中学33.3%、短期大学10.6%、大学8.1%などである。主として中等教育を担ってきたのである。

経験した学校種類は一人で二種類が35.3%で最も多く、一種類と三種類が25.4%でこれに次ぎ四種類が11.5%であり、六種類が最高であった。旧制から新制に移ったことにより種類数を増している。

② 学校数

学校数は学校種類より多くなっている。三校(20.0%)、四校(18.2%)、二校(17.3%)、六校(13.6%)、一校(10.9%)、五校(10.0%)の順であり、八校以上も3.6%あった。

(5) 卒業後の研修や講習への参加

「母校以外の開催した講習会・研修会」に76.4%が参加している。母校以外として、文部省や県や女高師の主催の講習会を挙げている。「母校の講習会」

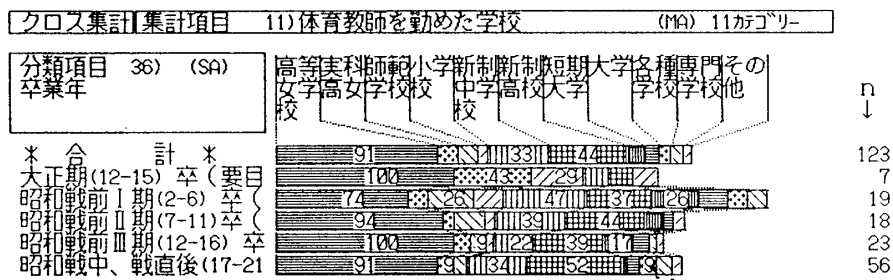


図4 体育教師を勤めた学校 (%・複数回答)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

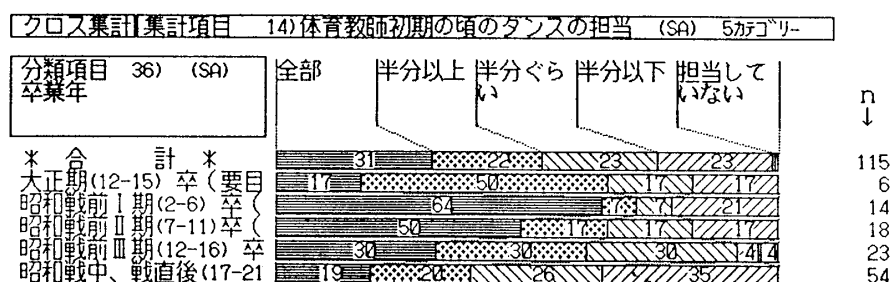


図5 体育教師初期の頃の担当授業中のダンス担当の割合(%)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

には60.9%が参加している。双方ともダンスの講習会が多い。運動会の花形であったダンスを講習会で習ってくるという場合がみられる。外国留学、進学が二名ずつあり、「特に何もしなかった」を選択した者も10.9%あった。

(6) 経験した役職

教科主任(49.5%)、寮監(38.7%)、生徒指導主任(31.2%)、学年主任(21.5%)等の経験がみられる。校長、副校長の経験者も僅かではあるが見られた。寮監、生徒指導主任が多くみられるのは女子体育教師の特色であろう。

2. ダンスの担当と

「女子体育は女子の手で」

(1) ダンスの担当

① 担当授業中のダンスの担当割合

体育教師の初期、中期、末期の自分の受け持ち時間中、ダンス(行進遊戯、唱歌遊戯)を担当した割合をたずねた。各期とも大きな違いはなかった。図5は体育教師初期の頃のダンス担当の割合である。全体では31%が全部、22%が全部まではいかないが半分以上、23%が半分ぐらいダンスを担当していたことがわかる。卒業年別にみると、全部ダンスであった者は昭和戦前I期(2-6年)卒の64%を最高にして、以後減少し続け、昭和戦中・戦直後(17-21年)には19%となった⁶⁾。戦前においては「全部」と「半分以上」を合わせて、60から71%の者が主としてダンスを教えていたことになる。およそ八、九割は「半分ぐらい」以上ダンスを教えていたことに

なるのである。それが戦中・戦直後には減少する。これはわが国の女子体育の内容の変化を示している。

高等女学校におけるダンス関係の教材は、大正15年の改正学校教授要目においては、遊戯及競技中に「行進遊戯」として歩行演習と7作品示され、昭和11年の第二次改正学校教授要目においては、遊戯及競技中に「唱歌遊戯及行進遊戯」として基本練習に加えて、唱歌遊戯7作品、行進遊戯15作品示されていた。ところが、昭和19年の中等学校体錬科教授要目(女子中等学校)においては体錬科体操中の「音楽運動」は、教材は減少し、内容には軍国的作品も含まれてはいたが、基本歩法が中心で体操化の傾向を示していった。

戦前においては、女子体育教師の受け持ち時間はダンス作品を教えることを中心としていたことが、女子体育教師はダンスの先生であるときみなされがちであった理由であった。

② ダンス以外の担当種目

ダンス以外に担当したことのある種目全部を複数回答でたずねた。その担当時期はたずねなかったもので、戦前とは限らない。図6に示すように、徒手体操が82.6%で最も多く、次いで、球技、器械運動、水泳までが約半数以上が担当した種目である。したがって女子体育教師はダンス以外では徒手体操を担当することが多かったということがわかる。

(2) 「女子体育は女子の手で」に対する意見

「あなたの経験から『女子の体育指導は女子の体育指導者の手によるべき』と思いますか。」とたずねた。五つの選択肢から回答を選んだうえでその理由の記入を求めた。女子体育教師を経験した結果、現

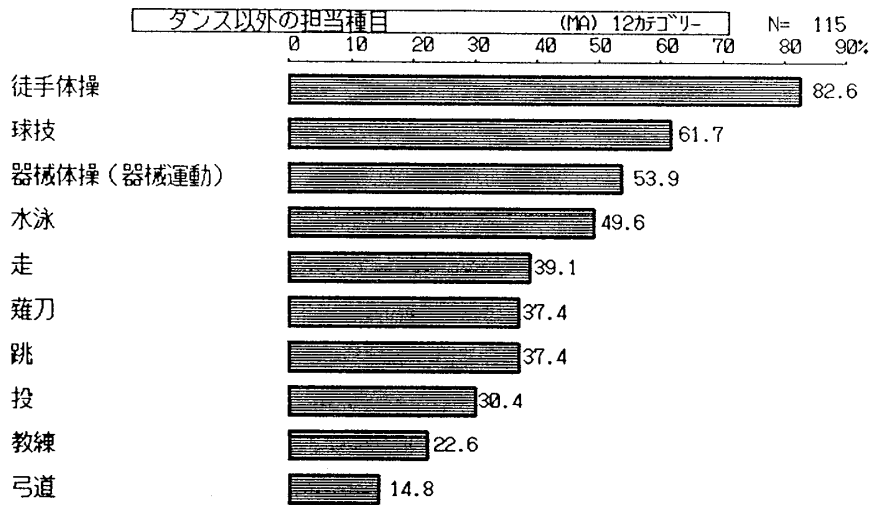


図6 ダンス以外の担当種目 (%)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

在はどう思うかということである。

図7に示したように、「全て女子指導者によるべき」は、昭和戦前I期(2-6年)が31%で最も高く、全体では15%にすぎなかった。明治36年の高等女学校教授要目で、「女生徒の体操はなるべく女教員が教えるべき」と示され、その後も一貫してこの考え方は受け継がれてきていた。昭和5年の体育運動審議会でも、「女子の体育運動は女子の指導者に依るを適当とするを以て女子指導者養成を一層十分ならしむること」と文部大臣に答申していたし、戦後になって昭和22年の学校体育指導要綱でも「中学校以上の女子の指導にはなるべく女子があたるようにする。」と示される。しかし、指導にあたってきた女子体育教師は「全て」とは考えなかった者が多いということ

になる。「全て女子指導者によるべき」を選択した理由としては、「女子の身体は女子が理解できる」、「礼儀作法指導上」、「女性らしさ、線の美しさは女子が」、「女生徒は男子教師を異性として捉える」、「男子は女子を厳しく指導できないから」などが述べられている。例えば、36期(昭和6年3月)卒の広瀬きぬは「女性には女性特有の体格、生理等があるので女子体育指導の方がふさわしいと思う。」と述べている。

最も多くの者が選択したのは「女性らしいダンスなどは女子指導者によるべき」である。全体では52%であるが、卒業年別にみると、大正、昭和戦前I期(2-6年)には「全て」を選択した者が他の時代より多かった分だけ、これを選択した者は他の時

分類項目	36)	(SA)	全て女子指導者によるべき	女性らしいダンスなどは女子でも男子でも良い	男子指導者によるべき	その他の考え	n
＊ 合計 ＊			15	52	28	14	117
大正期(12-15) 卒 (要目)			25	38	38	38	8
昭和戦前I期(2-6) 卒 (要目)			31	25	44	44	16
昭和戦前II期(7-11) 卒 (要目)			50	1	50	50	18
昭和戦前III期(12-16) 卒 (要目)			9	64	23	15	22
昭和戦中、戦直後(17-21) 卒 (要目)			17	58	17	8	53

図7 女子の体育指導は女子の指導者によるべきか (%)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

代より少ない。昭和戦前Ⅱ期（7-11年）以降は半数以上、特に、昭和戦前Ⅲ期（12-16年）が最大で64%の者がこれを選択している。その理由としては、総じて「女性と男性の特性を生かし、ダンスは女子が担当し、陸上競技や武道等その他は男子が」というものであり、「実際にそのようにしてきて大変良かった。」というのである。例えば、39期（昭和9年3月）卒の薄井磯子は「大きい学校では男子指導者と共にそれぞれ、特異性を生かして、分担指導した方がよろしいと思った。」、44期（昭和14年3月）卒の西沢たまは「共有（男女教師）が望ましいと思います。各自の特長を生かし体育教育に於いてもハーモニーが生まれます。」、47期（昭和17年3月）卒の別所秀子は「女性教師の特徴であるダンスは男子には指導が出来ない。又、女性の生きがいと思う。」、50期（昭和20年3月）卒の西島幸子は「ダンス等は女子指導者が適任であると思う。また、陸上競技やハードな球技は男子指導者で女子を鍛えた方が充実する。」と述べている。

こうして、女子体育教師がダンスを生きがいとし、ダンス教師となってしまったことは、次で述べるように女子体育教師の数が少なかったのでやむをえない面もある。しかし、「女子体育は女子の手で」が理想とされながら、それを定着させることができず、「ダンスは女子の手で」にしてしまった原因の一つになるのである⁸⁾。

「女子指導者でも男子指導者でも良い」は全体では28%である。卒業年別にみると、大正期以後昭和戦前Ⅱ期（7-11年）まで漸増し50%に達した後再び減少し、戦中・戦直後には17%となる。この理由

は、総じて「性別により区別するのではなく、個人の熱意や、力量による」とするものである。例えば、32期（昭和2年3月）卒の片岡敏は「指導者の熱意による。私達の頃のダンス講習会は主として男子講師であった。」、36期（昭和6年3月）卒の加納富美子は「真の指導力があれば区別の必要なし」、48期（昭和18年3月）卒の中山京は「女子の体育指導に力量を持っている男子の指導者もいると考えます。」と述べている。

「その他」は4%あったが、その理由は前項とほぼ同様で、「性別にこだわらない」というものである。49期（昭和19年3月）卒の細岡徳は「指導者が全ての指導力を持っているとは限らないので体育教科で話し合い、性別にこだわることなく協力し合うのが良いのではないのでしょうか。」と述べている。

「男子指導者によるべき」は皆無であった。性別にこだわらない場合もあるが、全員が女子体育教師は必要と考えていることになる。

体育教師初期の頃のダンス担当の割合別にみると、図8に示したように、ダンス担当割合が低い方が「女性らしいダンスは女子指導者によるべき」が、やや低い傾向があった。自分でダンスを受け持ったものの方が「女性らしいダンスは女子指導者によるべき」と考える傾向にあることになる。

(3) 勤務校の体育教師数と女子体育教師数

覚えている範囲で勤務校の全体育教師数とそのうちの女子体育教師の数をたずねた。体育教師数は次第に増加している。昭和22年以降は新制度となり男女共学校も現れたので、生徒には男子も含まれていることもあるが、それ以前は女子のみの学校である。

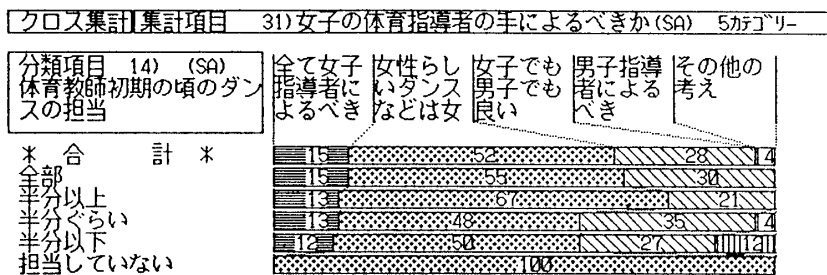


図8 ダンスの担当割合別女子の体育指導は女子の体育指導者によるべきか (%) (私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

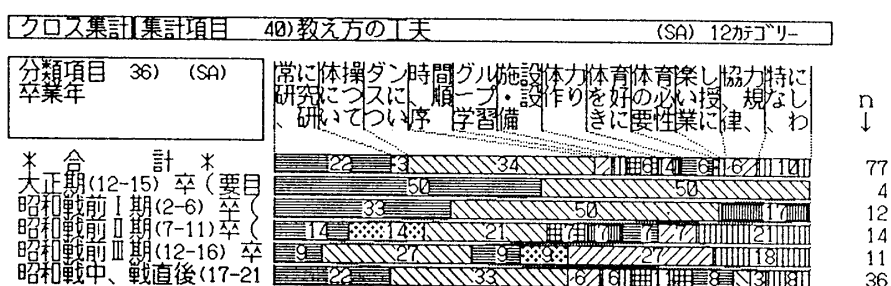


図9 教え方の工夫 (%)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

大正は記述不足なので除外し、昭和22年以前では、一校二人がどの年代でも最も多い。昭和元年から10年では46.2%，11年から15年では53.5%が二人である。旧制度期においては三人がそれに次ぐ。女教師数は、昭和51年まで最も多いのは一校一人である。一人の割合は昭和元年から10年では76.7%，昭和11年から15年では71.8%，昭和16年から21年では61.3%と次第に減少していく。女子体育教師は旧制度期においては、どの年代も一人、二人、三人の順であり、三人は10%以下である。昭和12年6月から13年3月の間に全国の中等学校の教員数を調査した、体育研究所の永田の報告では全国の女学校の一校平均体育教師は1.79人で女子体育教師は0.73人である⁹⁾。この報告では女教員数のいない学校も含まれているが、今回の調査では、最低一人は卒業生本人がいるので、女子体育教師数の平均は昭和元年から昭和15年までは1.31人、昭和16年から21年までは1.46人となっている。

3. 教育について

授業での工夫(教え方、教材、体操服、生理時の体育授業)、「嬉しかった時」、「つらかった時」、および、「苦勞した事」について自由記述で回答を求めた。これを意味から分類しカテゴリー化し傾向を捉えた。したがって、同じカテゴリーにあっても書かれた表現の仕方は異なる場合がある。「嬉しかった時」は一人で多くの事を書いている場合が多かったので、複数回答とし他は単数回答として扱った。ここでは以下の項目について自由記述例を挙げながら述べる。

(1) 教え方の工夫

図9に示したように、全体では回答者の34%であり、どの卒業期においても、最も多いのが「ダンスについての工夫」に関する事である。ダンスが女子体育教師に最も研究されていたことを表している。例えば、昭和1年から6年の島根県立今市高等女学校でのことを30期(大正14年3月)卒の鈴木トメは「ダンスの指導について(当時レコードなどなく、ピアノ一台自分で弾きながら教えた) 1. 先ず、教えるものを自演して見せる一生徒に意欲を持たせる、希望も。 2. 次に一節ずつ分けて覚えさせる。 3. 最後に続けてマーチに合わせて踊らせる。大切なことは一番だと思いが友達にも話したことがあるが、なかなか自信がなくてはできないと。それは自信を持っていたから」と述べている。戦前はこのような作品を教える工夫が書かれている。戦後になると創作ダンスの指導に対する工夫が述べられていく。ダンス担当時間別にみると、担当時間が多い方がダンスの工夫をしている傾向があった。

次いで、22%が「常に全てが研究であった」と述べている。例えば40期(昭和19年3月)卒の代谷藤子は「指導法は毎年、毎年の研究で、何年頃とは言えない。絶えず勉強を積んでいるが、良かったということは未だにない。」と述べている。体育教師年数別にみると年数が長いものにこの回答の多い傾向があった¹⁰⁾。

他は少数ずつ様々な工夫がされている。戦後になるとグループ学習のことや、楽しい授業にといったことが述べられている。

(2) 生理時の体育授業の工夫

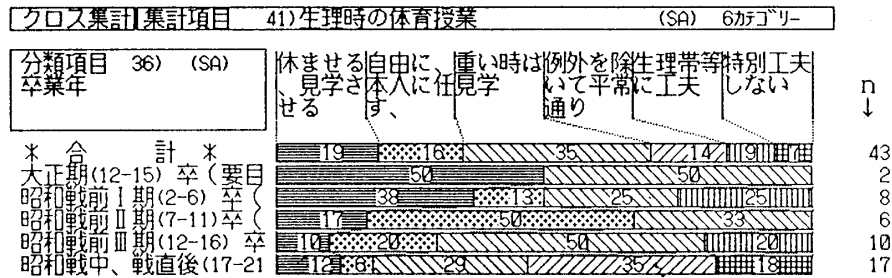


図10 生理時の体育授業 (%)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

明治36年の高等女学校教授要目で「生徒身体の定期的異状あるに際しては、体操を休止せしむべし」と示されて以来、生理時には体操科の授業は休ませる事になっていた。今日のような、吸水性、防水性のある快適な生理用品を使用できるようになったのは、昭和36年に「40年間お待たせしました」というキャッチフレーズとともに登場した「アンネナプキン」以後の事である¹¹⁾。それ以前は各自で脱脂綿を当てていたが、性能は良くなかったのである。生理時に体操科を休むということは、身体的な問題に加え生理用品の事情もあったのである。

この問に対する回答が少なく、傾向を捉えるにも不適切の誘りは免れない。図10に示すように19%が「休ませる、見学させる」、16%が「自由に、本人に任ずる」、35%が「重いときは見学させた」と約七割がほぼ休ませる方向である。「例外を除いて平常通り」と書いた14%の者は休ませない方向である。具体的に、「生理帯のデザインを工夫した」、「脱脂綿を普通の倍にした」と、各一名が書いている。「特別工夫しない」には当然休ませるからという意味が含まれて

いる。卒業年別にみると「休ませる、見学させる」は次第に減少する傾向を示している。

(3) 嬉しかった時

図11に示したように47%の者が嬉しかった事を授業の中に見いだしている。「授業で生き生きとした生徒を見たとき」等が24%、「授業で目標を達成できた時」等が13%、さらに、少数ではあるが、「授業でダンスが完成したとき」、「虚弱者、身障者も参加した授業」、「授業の施設・設備の完成」等が見られる。35期(昭和5年3月)卒の伊澤やゑ子は「生徒が自分の教えている種目を生き生きとして行っているのを見る時が最も嬉しい時です。」と書いている。

30%が「生徒や卒業生との触れ合い」に関する事を挙げている。卒業年別にみると、戦前Ⅱ期(2-6年)以降の割合が高い。他教科の教師との比較をせねば断定できないが、身体活動による体育という教科が人間の触れ合いから成り立つからであろう。48期(昭和18年3月)卒の桑原セエは「子ども達と肌と肌の触れ合いを大切にしていた。何でも話せる場を授業の合間に持ち、生活面等でもアドバイ

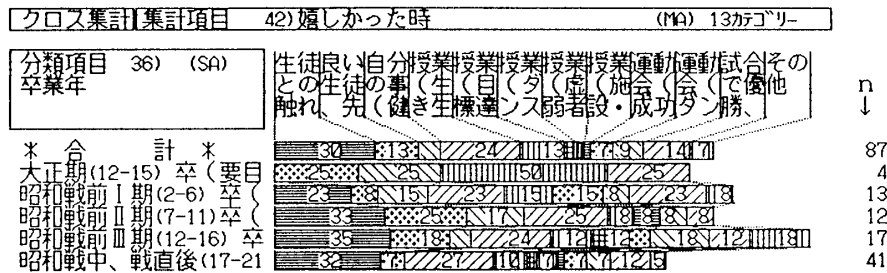


図11 嬉しかった時 (%・複数回答)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

クロス集計 集計項目 43) つらかった時		(SA) 13カテゴリー	
分類項目 36) (SA)	卒業年	嬉しい事 い事い事 のみはなす る(他何か)	n ↓
＊ 合 計 ＊		7 18 6 5 13 11 13 13 17 17	87
大正期(12-15) 卒(要日)		7 5 7 5 25	4
昭和戦前Ⅰ期(2-6) 卒()		25 8 17 8 17 18 1	12
昭和戦前Ⅱ期(7-11) 卒()		8 33 8 8 8 8 17	12
昭和戦前Ⅲ期(12-16) 卒()		6 24 12 18 18 12 18 26	17
昭和戦中、戦直後(17-21)		17 5 14 12 12 12 10 17	42

図12 つらかった時 (%)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

スしてやれたこと。」と書いている。卒業生の殆どが教職を退いた現在、卒業生との集いに幸せを感じている。45期(昭和15年3月)卒の田中英子は「教師冥利につきる事は本当に未だに沢山あり私の生き甲斐の様な気がします。一昨年も古希を祝って還暦の生徒が奥飛驒の温泉で85人も集まって楽しい三日間でした。」と書いている。

「運動会でのダンスの成功」が9%、「運動会の成功」が7%あり、合わせて16%が運動会の事を書いている。さらに、14%が「試合で優勝した事」、13%が「よい生徒、先生に恵まれた事」を挙げている。

体育教師年数別にみると、「生徒や卒業生との触れ合い」が次第に増える傾向にある。

女子体育教師の第一の仕事は体育の授業である。授業の中に嬉しかった時があることはそれぞれが懸命に授業をしてきた結果とみることができよう。様々な嬉しい事があるので、途中で辞めずに長期にわたって体育教師を勤める事ができたのであろう。さらに、教職を退いた現在も、教え子との触れ合いを大切にしている幸せな姿があるのである。

(4) つらかった時

女子体育教師は二重の差別、即ち、女性差別と体育教師に対する差別を受けてきたと思われるから、当然、つらかったと大部分が答えると予測していた。ところが回答を読んでそれは覆された。図12に示したように、つらかったことを尋ねているにもかかわらず、18%が「つらいことはなかった」、7%は「嬉しいことのみ」等と答え、計25%はつらいことはなかったということになる。例えば34期(昭和4年3月)卒の河村閑江は「自分の在籍中は全力で相勤め

ました。夢中でした。それは、後の喜びに変わりました。」と書いているし、39期(昭和9年3月)卒の立石綾子は「学校の環境もよく、生徒は優秀、家庭もまずまず(母親が子供の面倒を見てくれたので)、同僚(教師)との交友関係もよく、『つらかった』という思い出は全くありません。」と述べている。先に述べたように、音体の卒業生は体育教師を最後まで勤めたものが多いことに、つらいこともなく恵まれた教師生活を送ったものが多いことが関与しているのであろう。

つらかったことを書いた中で、13%の者が書いた二つの答がある。一方は予想の通り、女子であるから生じたつらさ、特に出産後や妊娠時の体育指導のつらさである。49期(昭和19年3月)卒の澤田綾子は「妊娠した時は辛かった。出産7週目で出勤。今の様に育児休暇等なかったため、体育教師は結婚したら無理かと思った。」と述べている。他方は体育教師であることから生じる身体上のつらさである。38期(昭和8年3月卒)の梅原たひは「運動設備のない学校では、冬の寒さの中、運動場で震えながら授業をした事など思い出します。」と書いている。さらに、身体上以外のつらさもあるのである。11%が書いているのが長期休暇や土日の出勤である。課外運動部の指導や、試合の引率である。48期(昭和18年3月)卒の香山田鶴子は「運動部の顧問をすると土、日もなく帰りも午後8時頃になるため、子供の成長期は大変でしたし、子供がかわいそうでした。」と書いている。その他、戦争中の指導、施設・設備の事、人間関係の事、体育の地位の低さなどがつらい事であった。

クロス集計 集計項目 44) 苦勞した事 (SA) 11カテゴリ		
分類項目 36) (SA) 卒業年	楽しい事はないばかり 苦勞はない 男子教師 妊娠・出産 自身・養育 授業 授業 授業 授業 授業 クラブ指導	n ↓
* 合計 *	15 15 4 7 11 12 11 21 11 7 8 3 9 13	75
大正期(12-15) 卒(要目)	20	5
昭和戦前Ⅰ期(2-6) 卒	42	12
昭和戦前Ⅱ期(7-11) 卒	10 10 10 2 11 11 10 10 20 10	10
昭和戦前Ⅲ期(12-16) 卒	13 19 13 6 11 13 19 13 16	16
昭和戦中、戦直後(17-21)	6 16 3 13 13 13 22 9 6 3 9	32

図13 苦勞した事 (%)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

過ぎ去ったつらさは忘れ、良い思い出だけが残っている人もあるかもしれない。また、一方ではつらいことを現在でも思い出す人もあるのである。教師は他の職業に比べ女性に早くから門戸が開かれ、先人の努力によって女子にとって働き易い職業となってきたが、女子であること、体育教師であることから生じたつらさはあったのである。

(5) 苦勞したこと

「つらかった時」と同じ様な質問であったかもしれない。この質問の回答も、「つらかった時」の回答と同様、予想が覆された。15%が「楽しいことばかり」、15%が「苦勞はない」と書いており、約三分の一が苦勞しなかったことになる。図13に示したように、「楽しいことばかり」は昭和戦前Ⅰ期(2-6年)率は42%もあり、その後減の傾向にある。図14に示したように、「つらかった時」の質問で、「嬉しいこ

とのみ」、「つらいことはなかった」と書いた者のうち、苦勞はないのは半数である。33期(昭和3年3月)卒の黒住静子は「苦勞は無かった。一生懸命やり生徒がついて来てくれる喜びのみだった。」と書き、34期(昭和4年3月)卒の竹田シエも「苦勞はありませんでした。スキー、スケート、水泳、何でもやって来られて素晴らしい人生だった」と書いている。

45%が書いているのが授業での苦勞である。最も多いのが21%の「教えてもできない」などである、次いで「施設・設備の貧困」、「保健の授業」、「ダンス指導」、「スポーツ指導」と続く。

その他、「自分自身の教養、身だしなみ」(9人)、「妊娠時、出産後、家庭の時間がないこと」(5人)、「男子教師との関係」(3人)、「クラブ指導」(2人)などが挙げられた。

前述のうれしかった時と同様、授業の中に苦勞が

クロス集計 集計項目 44) 苦勞した事 (SA) 11カテゴリ		
分類項目 43) (SA) つらかった時	楽しい事はないばかり 苦勞はない 男子教師 妊娠・出産 自身・養育 授業 授業 授業 授業 授業 クラブ指導	n ↓
* 合計 *	15 15 4 7 11 12 11 21 11 7 8 3 9 13	75
嬉しい事のみ	50	6
つらい事はない	50	12
体育に対する理解がなか	60	5
人間関係(他の体育教師	25	4
教師とは何か悩んだ	25	1
妊娠時の授業、育児	10 10 10 2 11 11 10 10 20 10	10
日曜、長期休暇も指導	14 14 14 14 14 14 14 14 14	7
身体(体調悪い日、寒暑	38 38 14 14 38 13 13	8
戦争時の指導(ダンスで	14 14 14 14 14 14 29	7
施設・設備が悪い	100	1
生徒の事(怪我、成績つ	100	5
自分の技術の未熟	50	2
練習時間がない	50	2

図14 つらかった時別にみた苦勞した事 (%)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

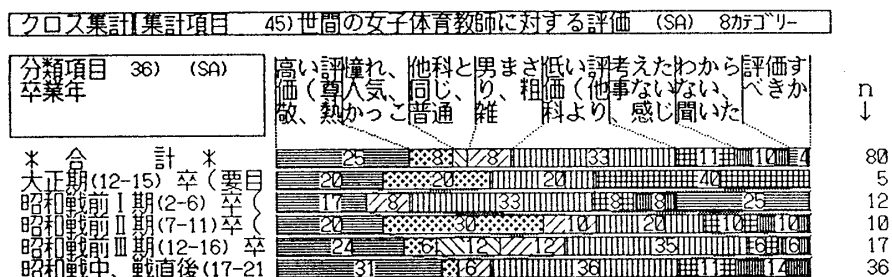


図15 世間の人々は女子体育教師をどのように評価していたと思うか (%) (私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

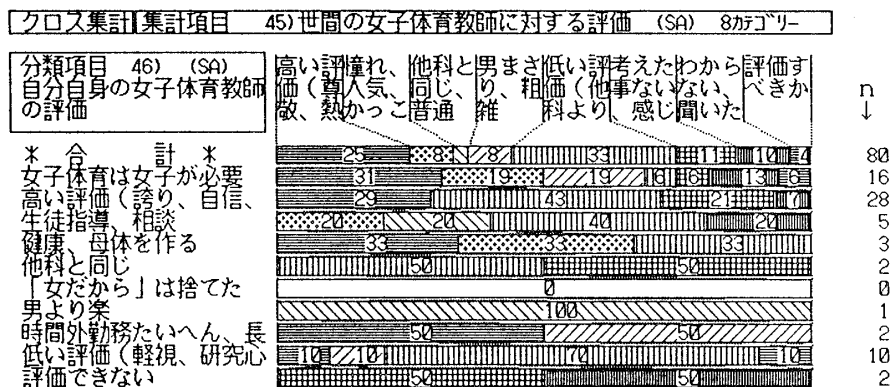


図16 世間の人々は女子体育教師をどのように評価していたと思うか (%) (自分自身の女子体育教師の評価別) (私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

あった者が多かった。苦勞したからこそ、嬉しかった時もあったということになる。

4. 女子体育教師に対する評価について

ここも、前項と同様、自由記述で求めた回答をカテゴリー化し傾向を捉え、自由記述例を挙げながら述べる。

(1) 世間の人々は女子体育教師をどのように評価していたと思うか

世間の人々は女子体育教師をどのように評価していたと思うかを尋ねた。尊敬、熱心などの「高い評価」が25%、「憧れ、人気」等が8%と合わせて33%が高い評価である。一方「低い評価」も33%であり、評価は分かれた。37期(昭和7年3月)卒の高橋八重は「少なくとも専門家として(音楽指導も含めて)尊敬されたと思う。(中略)中等教員そのものが中流以上の存在であった。」と書いている。それに対して、

33期(昭和3年3月)卒の川嶋勲は「一般教科教師より学力が低いように思われていたので、何時も他の教師に負けまいと心構えていました。」と書いている。他に、「男まさり、粗雑」、「他科と同じ」などがあり、「考えたことない、感じたことない」の11%、「わからない、聞いたことない」の10%があった。したがって、同じ頃同じ職業にあっても感じ方が様々であることがわかる。

図15に示したように卒業年別にみると、「高い評価」は昭和戦前Ⅰ期(2-6年)以降増加する傾向にあるが、「低い評価」も増加している¹²⁾。

図16は自分自身の評価と世間の評価との関係である。次の項で述べる自分自身の女子体育教師の評価で、「高い評価」をしている者の29%が世間の方も「高い評価」としているが、43%は世間は「低い評価」としている。したがって、自分は高く評価していた者のほぼ半数は、世間では低く評価していると考えたのである。

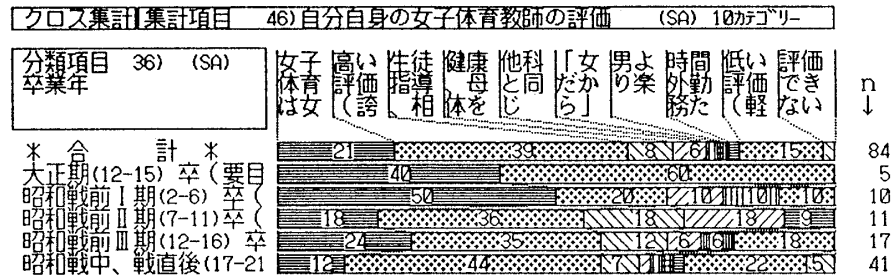


図17 自分自身の女子体育教師の評価 (%)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

(2) 自分自身は女子体育教師をどのように評価していたか

「あなた自身は女子体育教師をどのように評価していましたか」という質問に対して、図17に示したように39%が誇り、自信、誠実等の表現で「高い評価」を書いている。例えば38期(昭和8年3月)卒の山カヨは「誇りに思い藤村先生の教えに報いる様一生懸命楽しく勤めました。」と書き、41期(昭和11年3月)卒の井出まさ枝は「満足した日々を過ごさせて頂きました。女子の職業としては最高と自負いたしております。」と書いている。

18%程度を除いて、他の記述も表現の仕方には違いがあるが、高く評価しているものである。それらは、34期(昭和4年3月)卒の宮城ちよが述べた「女生徒の体育は女子体育教師が適当だと思いました。生徒と女教師は手を取り合い、心がぴったり合って、和気あいあいと指導出来た。」のように「女子体育には女子が必要」とするものが21%、「生徒指導、相談

に重要」が8%、「健康、母体を作る面に価値」が6%などである。それに対して、軽視、研究心不足等の「低い評価」は15%に過ぎない。前項の「世間は女子体育教師をどう評価していたと思うか」では33%が低く評価していたので、世間は低くみていると思うが、自分自身は高く評価する者があるということになる。

卒業年別にみると、「低い評価」が次第に増加している傾向にある。図18に示したように、世間の女子体育教師に対する評価別にみると、世間では高いとした者のうち、6%のみが自分自身では低いとしている。世間では低いとした者のうち、自分でも低いとしたのは29%であり、約七割は自分自身では高く評価している。自分自身の評価の方が高くなっている。自分自身で誇りをもち、満足して女子体育教師を勤めていた者が多い事が、苦難が多かったであろう時代に長い間の勤続を可能にしたのであろう。

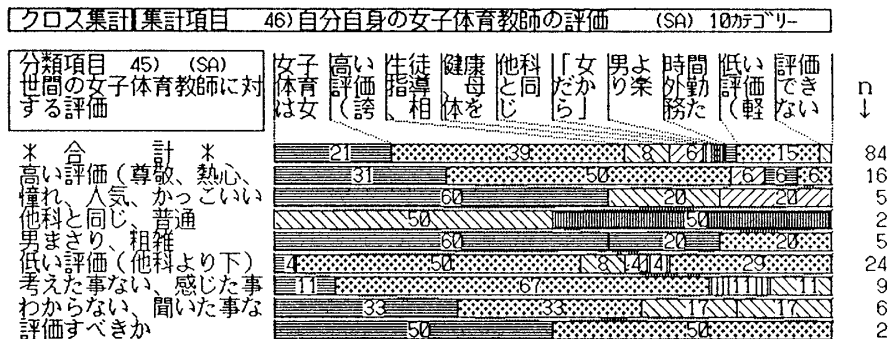


図18 自分自身の女子体育教師の評価 (%)
(世間の人々は女子体育教師をどのように評価していたと思うか別)
(私立東京女子体操音楽学校卒業生への1993年11月の調査による)

IV まとめ

戦前のわが国の女子体育教師の教育について、私立東京女子体操音楽学校の、大正12年から昭和21年の卒業生に対する調査結果から検討してきた結果、次のことが明かとなった。

職業生活のほとんどを、主として中等学校を3,4校転勤して体育教師として過ごしている。5年以下で辞めた者が21%あることが体育教師平均年数を下げたため、平均では22.5年であるが、41年以上が17.4%あった。87%が教師生活の最後まで体育教師を勤めており、他科へ移った者は少ない。体育(体操、体錬、保健体育)のみを受け持ったのは四割程度、体育と音楽を受け持ったことがある者も四割弱あり、体育と音楽に加えて様々な他教科を教えたことがある者もあった。卒業後も六割程度が母校の、八割程度が母校以外の講習会や研修会で学んでおり、講習の内容はダンスが最も多かった。教科主任を約半数の者が勤め、四割程度が勤めた寮監、三割程度が勤めた生徒指導主任は女子体育教師の特性から来るものであろう。

八、九割の者が担当授業時間の「半分ぐらい」より多い割合でダンスを教えている。昭和2年から6年卒業生の体育教師初期には64%が担当授業の全てがダンスであり、戦中・戦直後は19%に下がっている。戦前には女子体育教師はダンスの先生であることみなされていたことが確認された。ダンス以外の種目では、徒手体操を多く担当している。

女子の体育指導は全て女子指導者があたるべきと考えているのは15%のみで、過半数の者は女性らしいダンス等は女子があたるべきと考えている。

戦前の勤務校の一枚当たりの体育教師数は二人、女子体育教師数は一人が最も多く、一人の割合は76.7%から61.2%へ次第に減少している。この教師数が、女子教師はダンス、男子教師は体操、競技等を担当する形を作った。前報(8)で報告したように、この分業の形は望ましいものではなく、男子教師に対しても女子教師に対してもしばしば批判されるものであったが、本調査の結果、女子体育教師はそれ

が良いと感じていたことが明かとなった。こうしたことが、明治20年代末以降理想とされていた「女子体育は女子の手で」を戦前においては定着させず、「ダンス(行進遊戯)は女子の手で」を定着させてしまった。授業での工夫においても、ダンスの工夫を述べている者が多い。生理時にはほぼ七割の者が休ませたり、見学させた方向である。休ませたり、見学させたりした者は卒業年が古いほど多かった。

ほぼ半数が、生き生きとしている生徒を見た時、目標を達成できた時等の授業の中でのことを嬉しかった時として挙げている。三分の一程度は生徒、卒業生との触れあいを挙げている。予想に反して、つらかったことは全くないとの答が二割程度あった。つらかったこととしては、女子であることから生じる、出産後や妊娠時の体育指導が挙げられ、体育教師ということから生じたことでは、授業以外の勤務の長さが家庭や育児との関係から述べられていた。苦勞したことはないというのが三割程度あった。半数弱の者は授業での苦勞を挙げている。

世間の人々は女子体育教師を高く評価していたと思う者と、低く評価していたと思う者がそれぞれ三分の一ずつあり、評価が分かれた。八割程度の者は自分自身では女子体育教師を様々な表現で高く評価しており、低い評価は15%程度のみである。世間では低いと思っていると書いた者のうち七割は自分自身では高く評価している。

女子であること、体育教師であることから多くの困難を抱えていると思われる戦前の女子体育教師自身は、あまり、そう感じることなく教育に専念していたことが明かとなった。主としてダンス(行進遊戯、唱歌遊戯)を担当し、女子体育教師に誇りを持ち、授業や生徒との触れ合いの中に、嬉しいことも多くあったことが、途中で他の教科に移ることなしに、長期にわたり女子体育教師をやり遂げさせたと思われる。

本研究により女子体育教師自身からみた教育の実際を明かにする事ができた。紙幅の都合で、報告することが出来なかった自由記述等は次の機会に報告したい。

附記 本研究は平成五年度、平成六年度文部省科学研究費補助金（一般研究C）による研究の一部である。自由記述を含めての研究の全体は別途報告書を作成した。

最後になりましたが、今回の調査に快く応じて下さいました卒業生の皆様に厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 創設後半年は私立東京女子体操学校であったが、これも音体に加える。昭和19年3月には東京女子体育専門学校となり、昭和22年3月に体専1期生が卒業する。音体の卒業生数は東京女子体育大学所蔵の卒業生名簿によると、1601名である。
- 2) 回答可能者とは、本研究者等が1990（平成2）年に本学女子体育研究所で行った調査「本学卒業生の意識及び動態に関する調査」に回答を寄せて下さった者とした。この調査は住所の判明している生存している全卒業生を対象とし、全体での回答率は53.4%であったが、音体卒の回答は292名であった。今回はそれに2名を加えた。今回の調査の調査時の回答者の年齢は88歳から65歳である。
- 3) 大正期（12年から15年、学校体操教授要目による期）、昭和戦前I期（2年から6年、一次改正要目期）、昭和戦前II期（7年から11年、同前）、昭和戦前III期（12年から16年、二次改正要目期）、昭和戦中、戦直後（17年から21年、二次改正要目、体錬科教授要目期）の五期に分けた。
- 4) 掛水通子、「女子体育教員養成機関卒業生の職歴に関する研究(1)－私立東京女子体操音楽学校、東京女子体育専門学校、東京女子体育短期大学、東京女子体育大学1920－84年卒業生への調査から－」、**東京女子体育大学紀要**、第28号、1993年、pp. 1-10.
- 5) 「『時局と体育』を語る座談会（一）」、**女子と子供の体育**、3巻1号、1937年.p.33.
- 6) 卒業年別と体育教師初期の頃のダンスの担当割合はカイ自乗検定の結果5%水準で有意であった。
- 7) 「体育運動審議会概況」、**体育と競技**、9巻8号、1930年、pp.103-6.
- 8) 掛水通子、「昭和旧制度期における『女子体育は女子の手で』に関する研究」、**東京女子体育大学紀要**、第29号、1994年、pp. 1-8.
- 9) 永田進、「師範学校中学校高等女学校体操科教授担当教員の資格に関する考察(一)（中等諸学校体操科教員調査第一報）」、**体育研究**、5巻5号、1938年、pp.58-105.
- 10) 体育教師年数別と教え方の工夫はカイ自乗検定の結果1%水準で有意であった。
- 11) 小野清美、**アンネナプキンの社会史**、宝島社、1992年、p116
- 12) 卒業年別と世間の女子体育教師の評価はカイ自乗検定の結果5%水準で有意であった。